

京都女子大学図書館蔵『絵本双乃岡』

——元文二年版・西川祐信画『つれづれ草』出版史における一形態——

正 木 ゆ み

一 京都女子大学図書館新収本『絵本双乃岡』

平成二十七年（二〇一五）、京都女子大学図書館に、上巻表紙見返しへの挿絵に「絵本／双乃岡」「西川祐信画」と記し、下巻巻末に元文二年（一七三七）の刊記（版元部分欠）を記した江戸時代の版本二冊が新たに収められた（914・45）²（2831・2）。本書は、題簽を欠いているため、図書館では、上巻表紙見返しの「絵本双乃岡」という題を採用している（以下、「京女大本『見返し付』絵本双乃岡」と記す）。

本書を調査した結果、元文二年版『つれづれ草』（上下二巻）に表紙見返しを付けたものであることが明らかになった。元文二年版『つれづれ草』は、寛文七年（一六六七）版『つれづれ草』を、京都の版元菊屋喜兵衛が求版し、当時、京都で活躍していた浮世絵師西川祐信¹（寛文十一年「一六七二」）〜寛延三年「一七五〇」）が描いた挿絵を新刻・挿入して販売したものである²。享保十四年（一七二七）頃より、菊屋は、人気絵師西川祐信の手になる風俗絵本や古典文学を題材とした絵本を出版し始め、以降、祐信の絵本（以下「祐信絵本」と記す）を出版する中心的な版元となっていた³。

京女大本『見返し付』絵本双乃岡』上巻表紙見返しに付けられた「絵本双乃岡」という題について留意すべきは、菊屋が、元文二年版『つれづれ草』上下巻に描かれた祐信の挿絵丁のみを集めて一冊本とし、「絵本双乃岡 全」という題簽を付けて販売していることである。したがって、「絵本双乃岡」には、

- (1) 元文二年版『つれづれ草』上巻に「絵本／双乃岡」「西川祐信図」と記した表紙見返しを付けた二冊本
 (2) 元文二年版『つれづれ草』上下巻に描かれた祐信の挿絵丁のみを集めて、「絵本双乃岡 全」という題簽を付

けた一冊本

という、二種の形態の本が存在していることになる。

(2)の形態の『絵本双乃岡』については、現在、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（以下、「アルバート本」と記す）と日本大学文理学部図書館（武笠文庫）（以下、「日大本」と記す）に所蔵された二本が知られている。国内外の祐信絵本を網羅的に調査・研究された松平進氏の編著『日本書誌学大系57 師宣祐信絵本書誌』（青裳堂書店 昭和63・6）所収「西川祐信作画絵本（69 絵本双乃岡）」に、アルバート本の書誌が紹介されており、「日大本は掲出本（アルバート本）を指す。正木注）に表紙まで全て同じで、表紙中央に「絵本双乃岡 全」の原題簽を残している」（163頁）とある。

松平氏の解説によると、アルバート本の後表紙見返し掲載の菊屋の「絵本板行書目」すなわち蔵版目録が「半丁二段一四点」（163頁）のもので、「絵本双乃岡」が冊数抜きであげられているということである。このアルバート本の「絵本板行書目」については、同じく松平進「祐信絵本の版行と普及」（注3に同じ）において、「蔵版目録はその冊数も確定できなかった時点のもので、元文四年（一七三九 正木注）頃の状況を示している」（10頁）とされている。

一方、日大本の方の蔵版目録については、『日本書誌学大系57 師宣祐信絵本書誌』において、「半丁三段二四点で掲

出本（アルバート本を指す。正木注）より後の発行であると推測される」（163頁）とある。「半丁三段二四点」の菊屋の蔵版目録は、前掲松平論文「祐信絵本の発行と普及」では、「延享三年頃（一七四六 正木注）」（11頁）のものとなる。

また、近年、辻勝美「〈資料紹介〉日本大学蔵『絵本双乃岡』について」（『語文』133輯、日本大学国文学会、平成21・2）において、日大本が、原題簽の付いた表紙、および巻末の蔵版目録の図版などとともに紹介された。さらに、辻論文では、蒲原義明氏所蔵の元文二年版『つれづれ草』（以下、「蒲原氏本」と記す）の上巻の表紙に、挿絵を描いた見返しが付けられ、「絵本／双乃岡」「西川祐信図」と記されていることも紹介されており、次のように述べられている。

蒲原氏所蔵本の前表紙の見返しは、その書名からは元文二年刊本のものではなく、本来は『絵本双乃岡』（2）の形態の本を指す。正木注）のものであったとみるのが自然であろう。もし、これが最初から本書の見返しとして付されたものであったとすると、挿絵・絵師が同じであることから広告として利用されたものと考えることもできよう。いずれにしても現存する『絵本双乃岡』の二本（アルバート本と日大本を指す。正木注）にはみられない資料として注目してよい（57頁）。

辻論文で紹介された蒲原氏本の上巻表紙見返しや、下巻刊記部分（版元部分欠）など、京女大本（『見返し付』絵本双乃岡）と一致している。このたび、新たに、京女大本『見返し付』絵本双乃岡』が発見されたことで、「最初から」（前引辻論文）元文二年版『つれづれ草』の上巻に、「絵本／双乃岡」「西川祐信図」と記した表紙見返しを付けた本が出版されていたことが明らかになった。元文二年版『つれづれ草』の新たな一形態として、注目されよう。

このような状況を踏まえ、小稿では、京女大本（『見返し付』絵本双乃岡）を紹介するとともに、その出版時期や版元、および元文二年版『つれづれ草』に表紙見返しを付けて出版した版元の意図についても検討し、蒲原氏本を紹介された

二 京女大本『見返し付』 絵本双乃岡』の書誌と表紙見返し

京女大本『見返し付』 絵本双乃岡』の書誌は、次の通りである。

〔体裁〕 大本二冊。袋綴。上下巻とも原表紙（紺無地）。縦二五・七cm×横一八・三cm。

〔題簽〕 上下巻とも欠。

〔匡郭〕 四周单边。縦二〇・四cm×一六・二cm（上巻一オ）（以下、洋数字は実丁数）。

〔行数〕 一、二行。

〔表紙見返し〕 上巻表紙見返しに、「絵本^{えほん}／双乃岡^{をが}」「西川祐信^{すけのぶ}図」と記し、「兼好法師旧跡^{（1）}」という札が立つ、桜の木のある草庵に、菅笠の女性一名、下女らしき女性一名、はさみ箱を肩にかついだ下男らしき男性一名を描く。

〔丁数〕 上巻、六七・五丁（内、挿絵五丁）。下巻、五四丁（内、挿絵四丁）

〔挿絵〕 上巻、5オ、5ウ、16オ、16ウ、28オ、28ウ、41オ、41ウ、54オ、54ウ。
下巻、5オ、5ウ、16オ、16ウ、28オ、28ウ、41オ、41ウ。

〔版心〕 上巻、「〇つ上 一〜四」（本文丁）、「〇い」（挿絵丁）、「〇つ上 五〜十四」（本文丁）、「〇ろ」（挿

絵丁）、「〇つ上 十五〜廿五」（本文丁）、「〇は」（挿絵丁）、「〇つ上 廿六〜卅七」（本文丁）、「〇に」（挿

絵丁）、「〇つ上 卅八〜四十九」（本文丁）、「〇ほ」（挿絵丁）、「〇つ上 五十〜六十三（終）」。下巻、「〇

つ下 一〜四」（本文丁）、「〇へ」（挿絵丁）、「〇つ下 五〜十四」（本文丁）、「〇と」（挿絵丁）、「〇ろ

下 十五〜廿五（本文丁）、「〇ち」（挿絵丁）、「〇つ下 廿六〜卅七」（本文丁）、「〇り」（挿絵丁）、
 〇つ下 卅八〜五十終」（本文丁）。

〔版外〕 上巻挿絵丁、「上ノ又四」「上又十四」「上又廿五」「上又三十七」「上又四十九」。下巻挿絵丁、「下ノ又四」「下
 又十四」「下又廿五」「下又三十七」。

〔刊記〕 下巻終丁に、「元文二年丁巳弥生吉日 書林」。

〔蔵版目録〕 なし。

以上の書誌は、辻論文で示された蒲原氏本の書誌と、ほぼ一致している。一点異なるのは、蒲原氏本には、「右肩の後補題簽に「つれく草上（下）」と墨書き」（前掲辻論文57頁）がされていることである。京女大本『見返し付』絵本双乃岡』は、書誌の「刊記」にあるように、版元部分が削除されており、これも蒲原氏本と同様である。すなわち、現存する蒲原氏本・京女大本『見返し付』絵本双乃岡』は、いずれも、他の版元が、菊屋から、元文二年版『つれづれ草』の板木を求板した後に、出版した本であることが推定される。

〔見返し付〕絵本双乃岡』上巻表紙見返し絵の絵が、求版後の他版元による偽作ではなく、祐信によるものである可能性が高いことは、他の祐信絵本の絵と比較しても明らかである。参考までに、祐信絵本『絵本花紅葉』（初版は延享五年「一七四八」刊、植村藤右衛門他。菊屋喜兵衛求版本は、明和七年「一七七〇」刊）の挿絵を、京女大本『見返し付』絵本双乃岡』上巻の表紙見返し（図1）と比較のため、掲げる。ここでは、京都女子大学図書館蔵の『絵本花紅葉』（菊屋求版本 721・8/183 高村光雲旧蔵本）三丁表（図2）を掲出した。

図1、図2の、菅笠をかぶった女性、および、下女らしき女性について、画風の類似が認められ、『見返し付』絵本

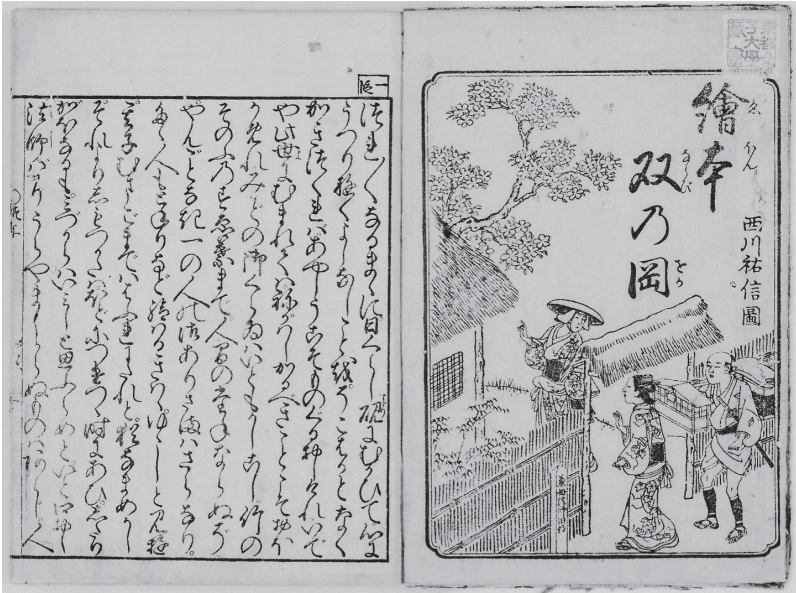


図1 京女大正『(見返し付) 絵本双乃岡』上巻巻頭



図2 京女大正『絵本花紅葉』3才

双乃岡』上巻の表紙見返しは、祐信が描いた可能性が高い。そして、この見返しの挿絵を祐信に要請したのは、元文二年版『つれづれ草』や、挿絵丁のみを集成した(2)の『絵本双乃岡』との関連からすれば、やはり、菊屋と見るのが自然であろう。したがって、他の版元が、元文二年版『つれづれ草』とともに、この見返しの板木も菊屋から求版して出版したのが、現存の京女大本・蒲原氏本(見返し付)絵本双乃岡ということになる。

そこで、次に、元文二年版『つれづれ草』出版史を概観した上で、その出版史における新たな一形態を示す資料である京女大本(見返し付)絵本双乃岡(以下、特に必要がない限り「蒲原氏本」と冠することを省略する)の出版が、いつ頃なされたものであるのか、可能な範囲で推測してみたい。

三 元文二年版『つれづれ草』出版史

元文二年版『つれづれ草』の出版史については、鶴見大学図書館第119回貴重書展「見る・読む・比べるⅡ―ドキュメンテーション学科による古典籍へのアプローチ―」(平成20年6月17日～同年7月12日)「Ⅱ」徒然草の版本^⑤(2、3頁)の展示解説が参考になる。次に、展示解説より引用する(3A～3Dは展示番号)。

- 3 A 徒然草 寛文7年(1667)刊 2巻2冊 大本
- 3 B 徒然草 元文2年(1737)京・菊屋喜兵衛・求版後印 2巻2冊 大本
- 3 C 徒然草 元文2年(1737)京・菊屋喜兵衛・求版後修 2巻2冊 大本
- 3 D 徒然草 「江戸後期」大坂・敦賀屋九兵衛・後修本求版後印 2巻2冊 大本

ここに挙げた4点は、同じ版木を100年以上にわたって使い続けているものである。(中略)CはBとほとんど同じだが、上巻冒頭4丁分(恐らく版木1枚分)は覆刻(かぶせ彫り)で新しくしている。その際、第4丁ウラ2行

目「べかめれ」に「べかんめれ」と撥音のカタカナ表記を加えているのが注意される。冒頭のみを改版したのは、全体を新刊に見せかける策略であろうか。

DはCの後印であるが、刊記の書林名を削除、下巻末尾に敦賀屋九兵衛の広告を1丁加えている。

以上の解説では、「元文二年版『つれづれ草』について、三段階の出版の過程が指摘されている。鶴見大学図書館にて、3A～3Dの本を調査したところ、3B「求版後印」本と3C「求版後修」本の違いが、右記の解説の指摘以外に、今一点見出された。それは、3B「求版後印」本上巻第一丁裏十一行目の「品」に振り仮名が付されていないが、3C「求版後修」本第一丁裏十一行目の「品」には振り仮名が付されているという点である。

京都女子大学図書館にも、二本の元文二年版『つれづれ草』が所蔵されている。それぞれ区別するために、「京女大 a本」「京女大 b本」とする。京女大 a本(914・45/Y86/1, 2)は、上記の法則をあてはめると、「求版後印」本であり、京女大本『つれづれ草』b本(914・45/Y86/1, 2)は、「求版後修」本と認定される。「求版後修」本である京女大 b本の下巻第五十五丁に1丁分の蔵版目録が付され、第五十五丁表冒頭に「絵本類書目 京寺町松原下町菊屋喜兵衛」とある。蔵版目録は前掲松平論文「祐信絵本の版行と普及」では、「安永初年」(11頁)頃のものとして「六三点三段二頁目録」(11頁)である。さらに詳しく検討すると、蔵版目録中、初版年が最も新しい「伊呂波歌絵鈔 全部三冊 下河辺拾水」が安永四年(一七七五)初版であるので、京女大 b本は、その頃に菊屋から出版されたものと推定される。この例より、少なくとも、元文二年版『つれづれ草』の「求版後修」本は、安永四年頃時点においては、まだ菊屋から出版されていたことがわかる。

そして、鶴見大学図書館の3D(以下「鶴見大D本」とする)は、大坂の敦賀屋九兵衛が、菊屋から、「求版後修」本を求版して出版した「後修本求版後印」本である。鶴見大D本は、版元が削られた刊記の状況からしても、京女大本

図3 京女大a本(求版後印本) 刊記

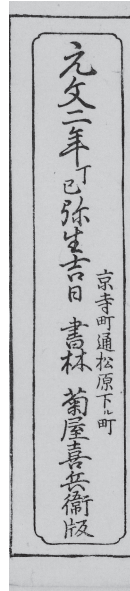


図4 京女大b本(求版後修本) 刊記

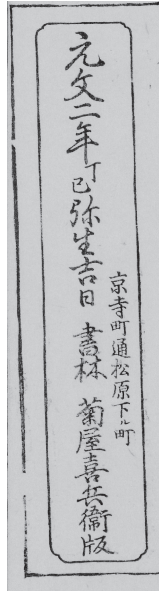


図5 鶴見大D本(後修本求版後印本) 刊記

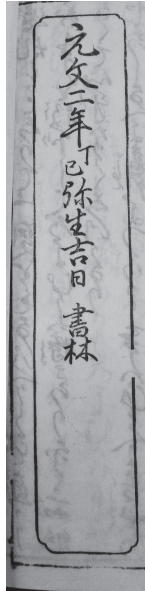
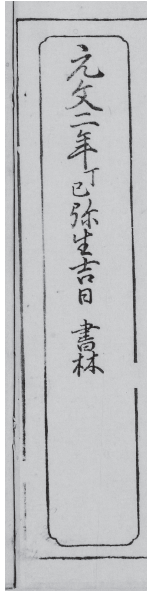


図6 京女大(見返し付)絵本双乃岡(後修本求版後印本)刊記



『見返し付』絵本双乃岡』との共通点が見出され、特に注目される。京女大本『見返し付』絵本双乃岡』も、第一丁裏十一行目の「品」に振り仮名が付され、第四丁裏二行目「べかシめれ」とあり、刊記の版元部分を削った「後修本求版後印」本と認定される。ここで、鶴見大D本と京女大本『見返し付』絵本双乃岡』の刊記を比較してみる。なお、参考に、京女大a本、京女大b本の刊記も挙げる。

京女大本『見返し付』絵本双乃岡』(図6)では、刊記を囲んだ枠の右に一箇所、および、左の匡郭に二箇所欠損が見られる。鶴見大D本(図5)でも、同様に刊記を囲んだ枠の右に一箇所、および、左の匡郭に二箇所欠損が見られる(写真では左の匡郭上方の欠損は見えないが、原本を調査したところ、欠損が見出せた)。ちなみに、京女本a本(求版後印本)(図3)では、刊記を掲載した丁の匡郭には欠損はなく、安永四年頃刊行された京女本b本(求版後修本)(図4)では、匡郭に二箇所欠損が見られるが、刊記の枠の欠損はまだ見られない。

さて、以上のように、京女大本『見返し付』絵本双乃岡』

は、鶴見大D本と、刊記や刊記を掲載した丁の匡郭の欠損状況も類似しており、両者の出版時期が近接していることが推測される。では、その出版時期はいつ頃であろうか。ここで参考になるのが、鶴見大D本巻末に付された敦賀屋九兵衛の広告である。前記の展示解説では、広告の内容については触れられていないため、次節では、この広告について検討してみる。

四 敦賀屋版『つれづれ草』と京女大本『見返し付』絵本双乃岡』の出版時期

鶴見大D本の刊記の後の巻末（第五十五丁）に、「文海堂蔵書予題目録 大阪心齋橋南二丁目 敦賀屋九兵衛」として一丁分広告が掲載され、十七点の書物が掲載されている。十七点の内訳は以下の通りである（広告文は省略し、便宜上番号を付す）。

- ①「歌枕秋の寢覚 有賀長伯著 小本二冊」、②「同 増補 三冊」、③「同 正誤 萩原元亮著 一冊」、④「名所ついまつ 加藤景範著 一冊」、⑤「草庵和歌集類題 小本 一冊」、⑥「同 卷懐形 薄用摺 一冊 寸珍本 薄用摺 一冊」、⑦「同 拾遺 一冊」、⑧「同 諺解 梅月堂著 全二十冊」、⑨「同 類句類題 未刻」（以上第五十五丁表）、⑩「勢語古意 賀茂真淵著 上田秋成校正 七冊」、⑪「古今和歌集打聴 同著 同校正 廿冊」、⑫「同 鄙こと葉 尾崎雅嘉著 二冊」、⑬「同 両序之部 同著 一冊」、⑭「自讃歌注 一冊」、⑮「和歌麿の塵 有賀長伯著 三冊」、⑯「百人一首基箭抄 北村季吟著 二冊」、⑰「同 ひとよかたり 尾崎雅嘉著 一名ひなこと葉 五冊」（以上第五十五丁裏）

この内、初版年を確認できる書で、最も新しいものが⑫『古今和歌集鄙こと葉』の寛政八年（一七九六）である。また、⑰は、尾崎雅嘉『百人一首一夕話』ひよがた（天保四年「一八三三」刊）九冊本の成立に関わる未刊の一書として、管宗次「尾

崎雅嘉自筆『百人一首一夕話』の成立』（『武庫川国文』44、平成6・12）において紹介されている。管論文では、寛政十二年（一八〇〇）九月版の尾崎雅嘉『和歌呉竹集』の巻末に敦賀屋九兵衛の広告が掲載され、その中に、「百人一首ひとよかたり 尾崎雅嘉著 一名ひなこと葉 五冊」（41頁）と見えること、および、尾崎雅嘉の『群書一覽』（享和元年「一八〇二」出版）巻四に、「百人一首ひなことば 四巻 尾崎雅嘉」（42頁）とあり、『和歌呉竹集』の広告の「百人一首ひとよかたり」との関連を指摘されている。さらに、管論文では、四巻本の成立を、寛政八年八月以前と推測されている。

寛政十二年（一八〇〇）九月版の『和歌呉竹集』については、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」⁽⁷⁾では、所蔵先が確認できないため、管論文の指摘に拠らざるを得ない。その限りでの推測になるが、⁽⁸⁾の広告を載せる鶴見大D本は、寛政八年〜寛政十二年頃、つまり、寛政末年頃に刊行されたのではないだろうか。このように、鶴見大D本が、寛政末年頃出版されたとすれば、菊屋は、元文二年版『つれづれ草』の板木を、寛政末年頃には、敦賀屋に譲渡していたことになる。京女大本（『見返し付』絵本双乃岡）には、版元に関わる情報は一切ないが、鶴見大D本と、刊記や、刊記を掲載した丁の匡郭の欠損状況も類似していることから、同様に、寛政末年頃に大坂の敦賀屋九兵衛で出版された可能性が高いものと考えられる。

五 菊屋と敦賀屋における『見返し付』絵本双乃岡』出版の意図

ここまでの検討を踏まえ、元文二年版・祐信画『つれづれ草』の出版史を改めて整理し、その流れの中で、『見返し付』絵本双乃岡』がどのような意図で出版されたのか考えてみたい。

元文二年（一七三七） 菊屋が、寛文七年版『つれづれ草』に祐信画を新刻・挿入して出版（求版後印本）。

元文四年（一七三九）頃 菊屋が、元文二年版『つれづれ草』より祐信の挿絵丁のみ集成して、一冊本の『絵本双乃岡』を出版。

寛延三年（一七五〇） 祐信没。この頃までには、菊屋の要請で、「絵本／双乃岡」「西川祐信図」と記した見返しの挿絵を、祐信が描いたか（出版時期は後述）。

安永四年（一七七五）頃 この頃、まだ、菊屋が、元文二年版『つれづれ草』（求版後修本）を出版していたことが確認できる。

寛政末年（一八〇〇）頃 敦賀屋が、菊屋から、元文二年版『つれづれ草』を求版して出版（後修本求版後印本）。

同じく鶴屋から、上巻表紙見返しを付けた元文二年版『つれづれ草』（後修本求版後印本）つまり『（見返し付）絵本双乃岡』も出版か。

さて、第二節で、『（見返し付）絵本双乃岡』の見返しの絵を、菊屋の要請によって祐信が描いた可能性が高いことについて述べた。その見返しが、当初、一冊本の『絵本双乃岡』出版時に見返しとして付けられたものであったかどうかについては、現存の二本（アルバート本と日大本）には、見返しが付いていないため、不明である。また、現時点では、菊屋の刊記を持つ元文二年版『つれづれ草』に見返しが付いた事例は報告されていない。

しかし、少なくとも祐信が没する寛延三年までには、菊屋が祐信に「絵本／双乃岡」「西川祐信図」と記した見返しの挿絵を要請したことはほぼ確実であり、現存しないものの、菊屋の段階でも、元文二年版『つれづれ草』上巻に見返しを付けて出版した可能性は十分考えられよう。では、そのような出版をした菊屋の意図は、何であったのか。第一節で引用した辻論文では、蒲原氏本の上巻表紙の見返しについて、一冊本の『絵本双乃岡』宣伝する「広告として利用された」可能性を指摘されていた。

今一つの可能性として、当初は、挿絵の画家が祐信であることを明示せずに売り出した元文二年版『つれづれ草』⁹⁾に、「西川祐信図」と明示した見返しを付けることで、元文二年版『つれづれ草』の挿絵も、人気絵師祐信によるものであることを標榜し、より多くの読者を獲得しようとしたということが考えられる。

前掲松平論文「祐信絵本の版行と普及」では、祐信が挿絵を描いた本の内、「読む事に重点のある書物では挿絵師の名を記すことはほとんどせず」（5頁）と指摘されている。確かに、『絵本徒然草』三卷（元文五年「一七四〇」刊 菊屋喜兵衛 所見本は京都女子大学図書館蔵本 914・45/N83）と『絵本垣衣草』¹⁰⁾三卷（寛延三年「一七五〇」刊 菊屋喜兵衛 所見本は京都女子大学図書館蔵本 721・8/N831～3）は、それぞれ、『徒然草』から特定の章段を抜粋して、その本文を引用した（『絵本徒然草』は適宜省略して引用）同じ丁に、時に当世風の絵もまじえた祐信の挿絵を掲載したもので、祐信の挿絵を主体とした絵本であるため、いずれも、第三巻の巻末に、画家が祐信であることを明記している。それに比して、『徒然草』の全章段を取めた元文二年版『つれづれ草』は、本文が主体の本であるため、当初は、特に、祐信画であることを標榜しなかったのである。

しかし、京都の吉野屋藤兵衛から出版された『伊勢物語』上下巻（延享四年「一七四七」出版 所見本は京都女子大学図書館蔵本 913・32/169/1、2）は、『伊勢物語』の全章段の本文に、祐信画の挿絵丁を挿入した本であるが、下巻巻末の刊記には、「画工 文花堂 西川右京祐信」と明示されている。祐信晩年の延享頃には、版元も、人気絵師祐信の高名を利用するため、本文主体であっても、祐信の名を明記するようになったのではないだろうか。あるいは、菊屋が「西川祐信図」と明記した見返しを付けた元文二年版『つれづれ草』を出版したのも、吉野屋の『伊勢物語』出版と同時期ではないかとも推測される。

〔見返し付〕絵本双乃岡』の見返しには、祐信の名前を標榜するだけでなく、一冊本の『絵本双乃岡』と同名の題を

記すことで、『見返し付』絵本双乃岡』が、『徒然草』の本文とともに、祐信の挿絵も楽しむことができる「祐信絵本」でもあるのだという商品価値を宣伝する機能もあつたであらう。

そして、前節で述べたように、寛政末年頃に、おそらく敦賀屋が、菊屋から、元文二年版『つれづれ草』と、見返しの板木を求版して出版したと推測されるのが、現存する蒲原氏本や京女大本の『見返し付』絵本双乃岡』ということになる。

松平進「古典の大衆化と祐信絵本」（注3に同じ）において、菊屋が、祐信没後約五十年程経た寛政末年には、祐信絵本のほとんどの板木を入手して版權を所有していたことが指摘されている（67、68頁）。しかし、足立賀奈子「菊屋喜兵衛の研究」（注3に同じ）では、菊屋が明和八年（一七七二）〜寛政十年（一七九八）頃には、祐信絵本に代わって仏書の出版へと転じたこと、寛政十一（一七九九）年〜文政期（一八一八〜一八二九）には、仏書の代わりに、往來物や地図・地誌などが増え始めたことを指摘されている（38〜74頁）。このように、寛政末年を境に、菊屋の出版傾向が変化していったために、元文二年版『つれづれ草』などの板木を、大坂の敦賀屋などに譲渡したのであらう。

前掲松平論文「古典の大衆化と祐信絵本」では、寛政末年以降、菊屋以外の版元において見られた「祐信人気にあやかろうとうする」（69頁）祐信絵本の出版の事例を挙げられている。そのような出版が見られた時期に、大坂の版元である敦賀屋が、元文二年版『つれづれ草』を販売するにあたり、『西川祐信図』「絵本／双乃岡」と記した見返しは、きわめて有効な宣伝アイテムとして機能したのではないだろうか。

おわりに

小稿では、京女大本『見返し付』絵本双乃岡』を紹介し、その出版時期や版元を推測するとともに、元文二年版『つ

れづれ草』に見返しが付けられた意図について検討してきた。京女大本『見返し付』絵本双乃岡』は、元文二年版『つれづれ草』の出版史における新たな一形態を示す本であるとともに、祐信作画本の息の長い人気や、それを、より多くの購買者に宣伝しようとする版元の意図をうかがい知ることができるといえる貴重な資料であるといえよう。

注

- (1) 西川祐信の先行研究に関しては、石上阿希編『西川祐信を読む 西川祐信研究会論文集』（立命館大学アート・リサーチセンター、平成25・3）所収、石上阿希編『西川祐信参考文獻目録（稿）』119～126頁など参照。
- (2) 神奈川県立金沢文庫編『神奈川芸術祭特別展 徒然草の絵巻と版本』（神奈川県立金沢文庫、昭和61・10）所収、高橋秀栄「絵入本徒然草の普及」84、85頁など参照。
- (3) 松平進「祐信絵本の版行と普及」10～12頁（『浮世絵芸術』53 日本浮世絵学会 昭和52・9）、松平進「古典の大衆化と祐信絵本」67～70頁（『文学』49 昭和56・11）、足立賀奈子「菊屋喜兵衛の研究」21～28頁（日下幸男編『文庫及び書肆の研究』龍谷大学文学部日下幸男研究室 平成20・3）など参照。
- (4) 表紙見返しに見える「兼好法師旧跡」は、第一節前掲辻論文56頁でも触れられているように、見返しに題にある「双乃岡」にあった兼好の庵を指す。兼好が京都仁和寺のほとりの双の岡に庵を結び、無常所を設け、桜を植えたことは、閑寿『兼好諸国物語』巻四第十九条第二十一条（宝永三年「二七〇六」刊 川平敏文編注『近世兼好伝集成』122～127頁、132、133頁、平凡社、平成15・9）など、江戸時代の兼好伝にも見える。
- (5) http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/tenji/20080617_119th/kichoshoten_no119.pdf
- (6) 敦賀屋九兵衛は、文海堂、松村氏。元禄十一年（一六九八）十一月、大坂末公認本屋仲間二十四件の内の一店。元禄頃から明治まで活動。塩村耕編『古版大阪案内記集成 翻刻・校異・解説・索引篇』（和泉書院 平成11・2）所収「二

「解説補稿」初期大坂の出版界について 付、元禄末年以前の大坂版元と出版物一覽」651、666頁、井上隆明編『日本書誌学大系76 改訂増補近世書林版元総覧』（青裳堂書店 平成10・2）482頁など参照。

(7) <http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>（平成27年11月28日閲覧）。

(8) なお、鶴見大D本の敦賀屋九兵衛広告⑤にも書名が見える『草庵和歌集類題』（船橋図書館 国文学研究資料館「所蔵和古書・マイクロ/デジタル目録データベース」<http://basel.nijl.ac.jp/~wakosyo> 平成27年11月28日閲覧）も、鶴見大D本と全く同じ広告を持つ。同書には、安永四年の刊記があるが、おそらく寛政末年頃の後印本であろう。

(9) 河野記念文化館蔵の元文二年版『つれづれ草』（求版後修本）下巻巻末の「菊秀軒蔵板 雑書目録」とある菊屋の蔵版目録に「つれづれ草 西川祐信画入 大字 二冊」とあり、元文二年版『つれづれ草』の絵師が、祐信であることを示す資料は見出せる。この蔵版目録の記載については、仲町啓子「西川祐信筆絵本徒然草と十七、八世紀の徒然草絵―西川祐信研究（一）―」42頁（『実践女子大 美学美術史学』3 昭和63・3）に指摘があり、稿者も国文学研究資料館のマイクロ（函号 315・476）で確認した。

(10) 祐信が『徒然草』を特に好んで絵本化したことについては、小池藤五郎「絵本文学の大家西川祐信と徒然草」（『かがみ』2 財団法人 大東急記念文庫 昭和34・8）、注（3）前掲松平論文「古典の大衆化と祐信絵本」61〜63頁、注（9）前掲仲町論文など参照。

（付記） 小稿を成すにあたり、京都女子大学図書館、鶴見大学図書館、日本大学文理学部図書館などの諸機関に、多大なるご高配にあずかりました。記してお礼申し上げます。

（本学教授）